

# 太刀の形 七本

一本目 相上段から先の <sup>きぐらい</sup> 気位で互いに進み、先々の先で仕太刀が勝つ	
打太刀 (諸手左上段) <sup>もろて</sup>	仕太刀 (諸手右上段) <sup>もろて</sup>
① 左足を前に出し、諸手左上段に構える。	① 打太刀の動作に合わせて (以下同様なので略) 諸手右上段に構える。
② 前足から三步で一足一刀の間合に進む。(以下同様なので略)	
③ 間合に接したとき、機を見て右足から踏み出し、「ヤー」の掛声で仕太刀の正面を打つ。	③ このとき、左足からひいて打太刀の剣先を抜き、右足から踏み出し、「トー」の掛声で打太刀の正面を打つ。
④ 下段のまま送り足で一步ひく。	④ 剣先を顔の中心につける。
⑤ さらに一步ひく。	⑤ 左足を出しながら諸手左上段に振りかぶり残心を示す。
⑥ 上体を起こしながら、下段から上げて中段となる。	⑥ 左足をひいて諸手左上段を下ろし、中段となる。
⑦ 構えを解き、左足から歩み足で五歩ひき、元の位置に帰る。(以下同様なので略)	

## 補足説明

- ① 左自然体となり、左拳を左額の前上約一握りのところとし、剣先は約45度後ろ上方に向け、やや右に寄せる。
- ③ア. 機とは、相手の「心」と「体」と「術」の変わり際に起こるときの「きざし」である。  
イ. この場合、打太刀が仕太刀に勝つ機会を教えているもので、仕太刀の十分になったところを見て打つ。  
ウ. 打つとき反動をつけることなく、仕太刀の柄もろともに正面に打ち下ろす気構えが大切である。「打つ」とは「切る」という意味である。  
エ. 上体はやや前傾するが、顔だけ上がる姿とはならない。  
オ. 目付けは外さない。「目付け」とは、目と目を見合わせることに原則であるとの理から「目を見る」こととする。  
カ. 右足から踏み出すときは左足を伴う。一方の足を移動させたときは原則として他方の足を伴って移動させる。(以下同様なので略)
- ④⑤ア. 送り足でやや前傾のまま二歩ひくことになる。  
イ. その時の歩幅は仕太刀との間合によって大小あることに注意する。  
ウ. 仕太刀の気位が十分に充ちたときにひくようにする。
- ⑥ 仕太刀が十分に残心を示した後、中段になり始める。
- ① 左拳を額の前上約一握りのところとし、剣先は約45度後ろ上方に向け、正中線上とする。
- ③ア. 自然体でひき、諸手も後ろに引いて剣先方向に抜く。  
イ. 抜きと打ちとは一拍子で行い、物打で打つ。  
ウ. 左足から右足も伴って後方にひいて抜き、右足から左足を伴って踏み出して打つ。一方の足を移動させたときは原則として他方の足を伴って移動させる。(以下同様なので略)
- ④ア. 十分な気位で打太刀を押しながら行う。  
イ. 顔の中心とは両眼の間をいい、剣先を付けるとは剣先の延長のことである。  
ウ. 気位とは、鍛錬を積み重ねたことによって得られた自信から生まれる威力、威風のことである。
- ⑤ア. 残心を示すとき、顔の中心を突き刺すような氣勢で押しながら行う。  
イ. 残心は一本目から七本目まで形(上段または脇構えなど)の示されている、いない、にかかわらず、十分な気位で相手の反撃に対応できる身構え・気構えで行う。
- ⑦イ. 元の位置に帰った後、いったん中段の構えになり、それぞれ次の構えになる。(以下同様なので略)

## 二本目 相中段から互いに先の気位で進み、仕太刀が先々の先で勝つ

打太刀 (中段)

仕太刀 (中段)

① 相中段となり、間合に進む。

② 間合に接したとき、機を見て右足から踏み出し「ヤー」の掛声で仕太刀の右小手を打つ。

② 左足から左斜め後ろにひくと同時に剣先を下げて抜き、大きく右足から踏み出すと同時に「トー」の掛声で打太刀の右小手を打つ。

③ 中段になりながら、左足から刀を抜き合わせた位置に戻る。

③ 相中段になりながら、右足から刀を抜き合わせた位置に戻る。

④ 元の位置に戻る。

## 補足説明

- ②ア. 剣先が後方に下がらないよう振りかぶる。
    - イ. 大技で仕太刀の右小手の位置よりわずかに低く打つ。
    - ウ. 斜め打ちにならないよう一拍子で打つ。
  - ③ 刀を抜き合せた位置に戻る動作は、打太刀が先に始める。(四本目、六本目も同様)
- ②ア. 剣先を下げる度合いは、おおむね下段と同じ剣先の高さとする。このとき、剣先を下げながら左後方にひらくので、その軌跡は自然に弧を描くことになる。ことさらに回して半円を描かない。
  - イ. 両腕の間から打太刀の身体が見える程度に振りかぶり、斜め打ちにならないよう一拍子の太刀で正しく打つ。
  - ③ 形に表さない残心なので、特に十分な残心の気位を示しながら行う。

# 三 本 目

相下段から互いに先の気位で進み、仕太刀が先々の先で勝つ

打太刀 (下段)	仕太刀 (下段)
<p>① 相下段に構え、間合に進む。                      ② 間合に接したとき、<small>きあらそ</small>気争いで自然に相中段になる。</p>	
<p>③ 機を見て、右足から一步踏み出しながら刃先を少し右に向け、「ヤー」の掛声で仕太刀の水月（みずおち）を諸手で突く。</p> <p>④ 右足を後ろにひくと同時に、仕太刀の刀を物打の右鑓で右に押さえる。</p> <p>⑤ 左足をひくと同時に、物打の左鑓で左に押さえる。</p> <p>⑥ 剣先を下げながら左足から後ろに歩み足で三歩ひく。</p> <p>⑦ 剣先を上げ中段になる。</p> <p>⑧ 右足、左足、右足と出て刀を抜き合わせた位置に戻る。</p>	<p>③ 左足から一步大きく体をひきながら、打太刀の刀身を物打の左鑓<small>しのぎ</small>で軽く入れ突きに<small>な</small>萎やし、右足から踏み出し「トー」の掛声で打太刀の胸部へ突き返す。</p> <p>④ さらに突きの氣勢で左足から踏み出し、<small>くらいづめ</small>位詰に進む。</p> <p>⑤ 三歩位詰に進む。</p> <p>⑥ 剣先を顔の中心につける。</p> <p>⑦ 相中段になりながら左足、右足とひく。</p> <p>⑧ さらに左足、右足、左足とひき、刀を抜き合わせた位置に戻る。</p>
<p>⑨ 元の位置に戻る。</p>	

## 補足説明

- ① 下段の剣先の高さは、相手の膝頭より約3～6センチメートル下とする。
- ② 気争いとは、双方の先に攻めようとする気の争いのことである。

③ 左鑓ですり込みながら突き、手元が上がらないように注意する。

- ④ア. 仕太刀が突き返したとき、剣先を仕太刀の刀の下から返して、諸手をやや伸ばし左自然体の構えとなり、剣先の延長を仕太刀の咽喉部につけて右に押さえる。
  - イ. 刃先は、わずかに右斜め下に向ける。
  - ウ. 右足のひき方は、注意して正確に行う。
  - エ. 左拳は、正中線から外れない。

- ⑤ア. 剣先を仕太刀の刀の下から回して返し、右自然体の構えになり、剣先の延長を仕太刀の咽喉部につけて左に押さえる。
  - イ. 刃先は、わずかに左斜め下に向ける。

- ⑥ア. 仕太刀の気位に押されて、剣先を下げながらひく。
  - イ. 下げた剣先は、上から見たとき仕太刀の体からやや外れる。

- ⑦ 仕太刀が残心を十分に示した後、剣先を上げ始める。

③ア. 相手の太刀を手元に萎やし入れ、すかさず突き返すことを入れ突きという。

- イ. 体をひかないで手だけでひくと、突き返すときの間合が正確でなくなるので、打太刀の進む程度に応じてひき方に十分注意すること。
- ウ. 打太刀の刀身を萎やす程度は、打太刀の剣先の延長が体を外れるくらいにする。
- エ. 萎やすとき、左拳が正中線から外れないようにし、刃先は右下を向き、突き返すときは真下を向く。
- オ. 突き返すときは、打太刀の突く刀身と仕太刀が萎やし、突き返す刀身の縁が切れないようにする。

- ④ア. 位詰とは、相手に対して優位な体勢を整え、充実した気位で相手を攻め寄せることをいう。
  - イ. 突きの氣勢をもって、左足を踏み出し（二度突きはしない）気位で詰める。

- ⑤⑥ すかさず右足から小足で三步やや早く位詰に進みながら、剣先を胸部から次第に上げ、顔の中心につけ、残心を示す。

- ⑦ 打太刀が剣先を上げ始めると同時に、剣先を下げて中段になりながら左足、右足とひく。